

### 『お互いに元気になれる。』 元気ファームが企業と地域に与える効果。



旭

ASAHI



対談

Man to Man株式会社 澤 知明氏 × 伊熊営農クラブ 後藤 京一氏

「試行錯誤しながら  
ひとつひとつやっていく  
ことが意味のあることだと  
感じています」



おいでん・さんそんセンターでは、山里交流コーディネートの一環として、都市部企業と山村地域をつなぐことで、双方の課題解決を図る新たな関係性づくりを目指す取組を推進しています。その事業モデルの一つとして、旭地区で耕作放棄地や農業の担い手不足などの問題を抱える伊熊営農クラブと、農業や地域との関わりを通じて若手社員の育成を目指すMan to Man(株)(名古屋市)のマッチング事例をご紹介します。

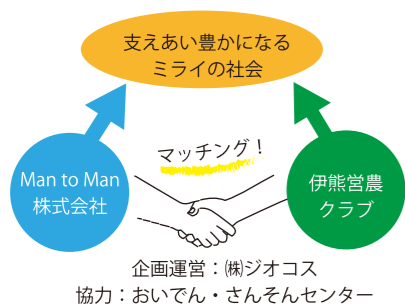
スタートして間もなく一年が経つこのプロジェクトで、企業、地域にそれぞれどんな効果が出始めてきたのか、お話を伺いました。



「管理ができなくて  
困っていた農地が甦った  
様子を見て、良かったなあ  
と思っています」



「元気ファームを導入したきっかけを教えてください。」  
澤 リーマンショック以降、Man to Man(株)の社内にはひどい閉塞感が漂っていて、「言われたことだけやればいい」といった風潮がありました。そんな中、海外進出のための赴任希望者を社内募集したのですが、若手社員は手を挙げませんでした。受け身な姿勢が蔓延していることにショックを受け、人材開発の一環として34歳以下の社員が定期的にイベントや勉強会をする「若手会議」をやることにしました。講師を呼んで勉強会を1年くらいやっていたのですが、何か面白みに欠けると感じていました。方向性を迷っていたところ、ちょうど(株)ジオオスの伊藤社長が元気ファームの企画を提案しにきました。それを聞き「これだ」と導入を即決しました。  
「人材開発の点から元気ファームが良



Man to Man 元気ファーム  
プロジェクトのイメージ

### おいでん・さんそんセンター 応援団からのメッセージ vol.2

from  
足助地区

足助地域会の活動紹介

とよた都市農山村ネットワークの旭、足助、稲武、下山各地域では、年2回(夏と春)に豊田市の小学生を対象にして、地域の特色を生かしたいろいろな体験が出来るフリー版セカンドスクールを開催しています。足助地域会では、川遊び、薪でご飯を炊く五平餅作り、流しそうめん、竹を使った器作り、星空観察など普段子どもたちが出来ない遊びや体験を通して地元の人と共に田舎の良さを伝えて行きたいと思います。また、参加した子どもたちは、自然の中に居るだけで元気にはしゃぎまわり、初めて出会う子どもたち同士で友達になったり体験を楽しんでいるようです。



レポーター

小川光夫(おがわみつお)さん



名古屋市出身。高校2年の時からユースホテルを利用して全国を旅していました。旅をしているうちに田舎に住みたいと思うようになり約30年前に田舎に移住。今は、「あすけ里山ユースホテル」の運営をしています。地域の方たちにいろいろ教えて頂きながら、妻と共に田舎暮らしを楽しんでいます。

「貧乏とは少ししか持っていないことではなく、無限に欲がありいくらあっても満足しないこと。」4月に来日した絵本「世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ」で知られる南米ウルグアイの前大統領ホセ・ムヒカ氏の言葉だ。お金持ちを「お大尽」と呼び、成功者と評する日本であるが、ムヒカ氏は若者を中心に人気と共感を集めた。私も含め圧倒的多数の国民は「あなたはお金を持っていないが貧乏ではない。」と言われた気がして拍手喝采である。  
質素、節約を美德とし礼節を重んじた日本人が一転し、「エコノミックアニマル」と揶揄された高度経済成長期から40年以上が経過した。今日もなお「お金とモノ」に振り回され続けているのは、金融を軸にした市場経済そのものの性であるようだ。お金に振り回されて失脚する政治家のニュースも後を絶たない。  
ムヒカ氏の来日講演のテーマは「日本人は本当に幸せですか?」。市場経済は人々に浪費を強いるシステムである。お金に支配された過剰な消費社会、何かを買うために生きる生き方が本当に幸せかを問い、地球規模の浪費が人類の未来をも危うくしていると警鐘を鳴らした。  
都市での「買う暮らし」に不安を感じ、いなかでの「つく暮らし」を求めて移住する人々が増えている。限られた人生という時間の中で、家族や他者に愛情を注ぐ時間を大切にす彼らの生き方こそミライのフツツになる。ムヒカ氏がエールを送ってくれているようだ。

### イベント情報

#### 芳友町の万燈祭り

水難・疫病を除ける伝統のお祭りで「たいまつ」を振り回し、盛大に花火をします。ふるさとの歴史や文化を体験しませんか?

●日時: 2016年8月14日(月) 17:00~20:00、15日(月) 17:00~20:00 ※花火は両日とも22時まで。※1日だけの参加もできます。

●参加資格: 小中学生の男子児童生徒※家族や参加する男子のお父さんや妹さんも同伴できます。

●参加費: 1,200円(花火代・保険代) ※同伴する姉妹も花火代をお願いします。

●集合場所: 石野交流館駐車場

●集合時間: 17:00

●活動場所: 豊田市芳友町公民館近辺

●募集人数: 8名(両日とも)

●問合せ: おいでん・さんそんセンター TEL 0565-62-0610

●申込: メール [sanson-center@city.toyota.aichi.jp](mailto:sanson-center@city.toyota.aichi.jp) 又は F A X 0565-62-0614 でおいでん・さんそんセンターまでご連絡ください。

●詳細情報: おいでん・さんそんセンターHPのイベント情報でもご覧いただけます。http://www.oiden-sanson.com/event/event-pre/ishino/entry-808.html

#### 橋めぐりと綾渡踊り

国指定重要無形民俗文化財『綾渡おどり』を覚えて、夜念仏見学と綾渡踊りに参加してみませんか? 3回全て参加できない方、各回のみでもお申込いただけます。

●日時: 2016年7月6日(水) 10:00~14:00【第1回橋めぐり・綾渡めぐり-歴史と文化】7月23日(土) 13:30~15:30【第2回綾渡踊りの実演と体験】8月10日(水) 18:30~21:30【第3回お念仏と綾渡踊り】

●対象: どなたでも(山道を歩いたり、踊ったりできる方)

●定員: 各20名

●参加費: 第1回のみ1,000円(昼食代・当日集めます)

●持ち物: タオル・水分補給のできるもの

●その他: 動きやすい格好でご参加ください。(1回目は野外散策なので履きなれた靴・長袖・長ズボン・帽子・雨天決行)

●問合せ: 豊田生涯学習センター足助交流館 TEL0565-62-1251

FAX 0565-62-1252

●申込: 6月15日(水) 午前9:30より電話、窓口、F A Xにて足助交流館へ申し込み(窓口優先) ※月曜休館 ※詳細は足助交流館公式WEBでご覧いただけます。

その他の情報は、センターHPをチェック!

#### ムヒカ前大統領





色んな人に関わって  
もらうことで嬉しい  
効果が増えていくと  
思います。(取材/  
坂部友隆・文/木浦  
幸加)

ろうと話が膨らみました。「元気の泉」と名付けた計画をわくわく事業に申請し、補助金をもらって実現に向けて動きはじめています。モノの絵画『睡蓮』のような美しい景色を作って伊熊の名物にしたいです。

— 今後の抱負をお聞かせください。

澤 「元気ファーム」の活動がすぐに会社業績アップにつながるかと、社員が目に見えて変わるとか、短期で結果が出るわけではないと思います。試行錯誤しながらやっていく作業や京一さんを始めとした伊熊町の皆さんとのコミュニケーションのひとつを丁寧に行っていくことがMantoman(株)にとって意味のあることだと感じています。仕事とは別の活動を続けることで、中長期的に新しいビジネスのヒントも得られると考えています。

京一 受入れ側として今は伊熊町の人が中心ですが、築羽自治区の人たちにもこれから積極的に関わってもらえるように働きかけていきたいと思います。今度らっきょうを掘って漬ける体験してもらおうんですが、その講師を築羽自治区の人にお願



たくさんの方々が月1回の活動に参加しています。

澤 与えられた条件の中で、強制されずに自発的に企画し実行する。田畑を耕し、米や野菜を作る元気ファームでは、若手社員が育つプロセスを重視した取組ができると感じたからです。普段の仕事では失敗すると上司にとがめられても、「元気ファーム」での失敗は自分自身で反省して次に活かせばいい。可能性のある事業だと感じてわくわくしました。

— 伊熊管農クラブが、Mantoman(株)の受け入れを決めた経緯を教えてください。

京一 伊熊町では30年くらい前から徐々に管理できなくなった田畑が増え、農地の荒廃が進んでいました。どうにかしたいと始めたのが伊熊管農クラブです。町内で余力のある人が耕作を請け負い、地域で支え合って農地を維持していく仕組みです。最近では請け負う側も大変になってきて管理できなくなる農地が増えてきました。そういう農地を含め、地域全体に関わってもらえると聞いてお引き受けしました。

— 社員の方たちと活動されてきて、印象に残ったエピソードはありますか？

京一 始まって間もない頃、堆肥を撒いてもらったことがありました。7月の暑い中での作業だったので、皆さん張り切りすぎたのかバテていましたが、涼しいところで休憩を取ると和らいだ表情に変わりました。若い方たちのそんな顔がいいなと感じま

伊熊町の動きが自治区全体に広がるうとしていきます。松嶋区長にお話を伺いました。

築羽自治区として平成

29年度頃から、県営

農地環境整備事業の補

助を受け、今後耕作が統

けられるよう農地の修繕を行なってい

きます。しかし、高齢化や担い手不足

の問題を抱える中、個々の農地を維持

管理していくのは容易ではありません

ん。今年度から伊熊町の取組を広げる

べく、築羽地域として受け皿をつくら

ていきたいと思います。動き出したのが

「つくば管農組合」の組織化です。伊

熊町を主体としてその他に惣田、小

畑、横本、日下部町の賛同者に加え

てもらい集落管農の枠組みを拡大。そ

れに一本化しようという訳ではなく、

自分で管理できる地域は続けてもら

い、お手上げになった地域は管農組織

に入ってもらいます。管農組織で全て

背負うのではなく、どうしたら続けて

いけるか、話し合いで決めていきたく

と思っています。

農地保全と同時に、移住者の受入れ

のために使われていない空き家を貸し

てもらえるよう働きかけていくなど、

過疎対策にも今後取り組んでいきたい

と思っています。(取材・文/坂部友隆)



松嶋利光さん

### 竹皮拾い研修ツアー開催

6月15日(水)、竹皮拾い研修ツアーを開催しました。昔から日本人の生活に欠かせないものだった竹。竹の皮は食品の包装などに使われてきましたが、国産のものは少なくなっています。岐阜県可児市の吉田包装店さんからの呼びかけで、昨年からおいでん・さんそんセンターで竹皮拾い・出荷のコーディネートをしています。

ツアーには豊田市内外から4名が参加。可児市の竹林で吉田さん指導の下、竹皮を拾う時のポイントを聞き、実際に拾ってみました。

まず、拾う竹の種類は真竹のみ。竹皮の落ちる期間は6月中旬〜7月中旬で、雨



いて食べさせてあげたらどうだろう」とか、色々考える機会になります。伊熊町が賑やかな様子を見て、他の地域の方に「いろいろやられていますね」と言われれば嬉しい。田舎には部落根性みたいなものがある(で笑)。月1回の寄合に出てくる人数は受入れ前には13人だったのが最近はいつも24人出てくるようになりました。「元気ファーム」のおかげで地元も元気になってきています。

豊田市のわくわく事業に申請して新しい取組も始めました。水はけの悪い田んぼがあつて、社員の方からそこに花を植えたというアイデアが出たんですが、普通の花を育てるのは無理。使っていなかった井戸水を入れて蓮の花を浮かべたらどうだ



活動を重ねるごとに、社員同士のコミュニケーションが良くなっているそうです。



県外 KENGAI



竹皮を拾うのは、まず入れる竹林がなくはできません。竹林整備の活動あつてこそなのです。

春にはタケノコを掘り、初夏には竹皮を拾う。切った竹を色々なものに利用する。そんな循環の輪が再び広がると思います。ね。自分たちにもできることを模索していきたいと思います。(文/鈴木明日香)